

## 国際ワークショップ（2017年9月26日開催）について

本ワークショップは、2015年度より2017年度まで日本学術振興会科学研究費助成事業の支援を得て推進した基盤研究（B）「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」（研究代表者富盛伸夫）の主催、科研基盤研究（C）「東南アジア語圏におけるヨーロッパ系言語との接触・混成現象に関する動態的記述研究」（研究代表者黒澤直俊）、スーパーグローバル大学創成支援事業（東京外国語大学：「世界から日本へ、日本から世界へ 一人と知の循環を支えるネットワーク中核大学—」）、大学教育再生加速プログラム・テーマV「卒業時における質保証の取組の強化」（東京外国語大学）および東京外国語大学語学研究所の共催により開催されました。

本ワークショップの企画は、「CEFRの受容と適用可能性をめぐって」という大きな枠組みの問題設定から生まれました。CEFRがEU域内から世界各地に適用されようとする今日の趨勢の中で、我々研究グループではEUローカルの言語能力参照枠組みの再検証、特に東京外国語大学の教育現場で親しいアジア諸語の言語的特性や社会・文化的特質を考慮した適用可能性の研究と方策の開発に取り組んでいます。

本日の発表者、タイ語教育と日本語教育が専門の東京外国語大学のスニサー・ウィッタヤーパンヤーン先生は、タイ国内でのCEFR導入への動向と社会・文化的側面からのCEFR利用の問題提起を行って下さいます。岡野賢二・トゥザ ライン・富盛伸夫の共同発表ではミャンマー・ヤンゴン市内での大学や語学学校等の現地調査の報告を踏まえ、現在までのCEFR Descriptorsでは対応しきれないアジア諸語に認められる多様な要因を分析して、社会・文化的特質に配慮した付加的記述項目（Supplements）の策定への提案を行います。

折しも、EUのCEFR関係機関では、発足後15年以上経て新たな部分的拡充への努力が続けられ、CEFR改訂版（Council of Europe (2017) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment: Companion Volume with New Descriptors Provisional Edition.*）の公開が最近なされました。この改訂作業に加わった東京外国語大学の根岸雅史先生による最新動向に関する詳しい報告にあるように、学習者の動機・ニーズの多様性と複言語併用状況を前提にしたCEFR改訂の道程が明確に示されています。この方向性が我々の研究展望とも大きく重なることが確認でき、さらなる研究交流が今後期待される次第です。

日本では英語教育へのCEFR活用に向けた研究が進んでいますが、その中核にあるのが投野由紀夫先生の研究グループです。東京外国語大学ではさらにCEFRを専攻言語27言語に適用するための工夫がなされていますが、今回のワークショップではその経緯と実際の作業についてご紹介いただくことができました。投野先生にはご多忙の中ご協力いただき、深く感謝申し上げます。

最後に、研究拠点として開催への便宜を図っていただいた東京外国語大学語学研究所と協力者として準備や運営にご尽力いただいた東京外国語大学語学研究所事務補佐の深尾啓子さん、東京外国語大学大学院総合国際学研究科学生 YI Yeong-il さん、トゥザ ラインさんに深く感謝申し上げます。

2018年3月

研究代表者 富盛伸夫（東京外国語大学）